HOKKAIDO UNIVERSITY

Title	札幌農学校生徒の小樽フィールドワーク
Author(s)	山本, 美穂子
Citation	緑丘アーカイブズ : 小樽商科大学百年史編纂室ニュース, 8, 2-3
Issue Date	2008-09-30
Doc URL	https://hdl.handle.net/2115/34878
Type	journal article
File Information	yamamoto.pdf

Hokkaido University Collection of Scholarly and Academic Papers : HUSCAP

札幌農学校生徒の小樽フィールドワーク

山本 美穂子

“水母君は海邊に逍遙せる”

札幌農学校生徒であった有島武郎は、1897年4月19日、高島郡高島村方面へ動物学の「修学旅行」に出掛けた。小寺甲子二助教授に引率された予科5年級29名は、翌日、北海道庁水産課技手の野澤俊次郎の案内で、ニシンの産卵跡を見学、ウニの解剖を行なうなど実地研究に励んだ。冒頭の引用文は、「水母（クラゲ）」と渾名された有島の同地での様子を描写した一文である（札幌農学校学藝会『学藝会雑誌』第23号、1897年9月、64頁）。

札幌農学校では、農学、農業経済学、植物学、動物学、地質学、工学などの実地研究のため、教官引率のもとで、生徒を道内各地に派遣していた。さらに、生徒のみによる夏期休暇を利用した長期旅行も合わせて、「修学旅行」と総称した。旅行後には、生徒が旅行行程を『惠林』・『学藝会雑誌』・『文武会雑誌』・『文武会々報』といった校友会誌に発表し、校長宛には報告書「修学旅行報文」を提出した。「修学旅行報文」は、札幌農学校に係る公文書である「札幌農学校簿書」（約1,000冊、北海道大学大学文書館所蔵）中に、38冊確認できる。

高島郡における植物学修学旅行

動植物学修学旅行一行（1901 年頃）植物園所蔵

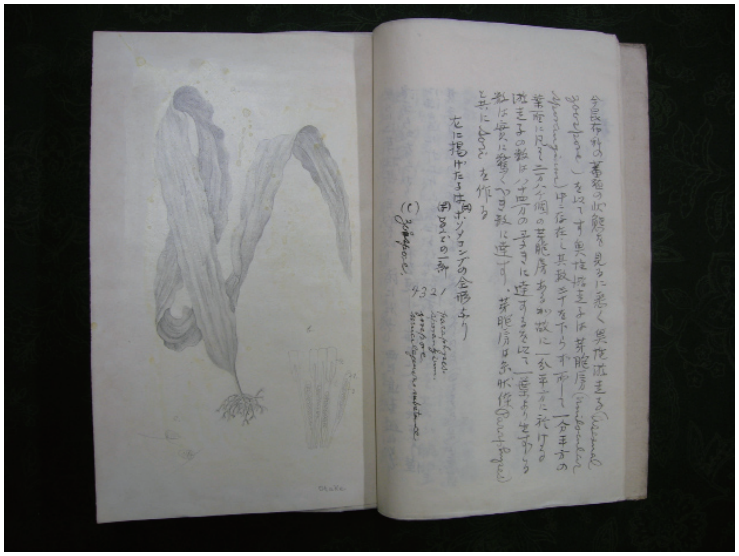
高島郡方面への修学旅行は、上記のような動物学研究を目的としたほかに、植物学研究のためにも行われた。1903年10月12～13日、宮部金吾教授（兼植物園長）が有元新太郎（植物園雇）と共に本科2年級19名を引率した旅行は、佐藤昌介校長にあてた宮部教授による「復命書」（同年12月2日付。札幌農学校簿書No.738）、生徒代表（鈴木力治、宮城鐵夫、大竹温孝）による「植物採集修学旅行報告文」（同日付。札幌農学校簿書No.780）として詳細な記録が残っている。

「植物採集修学旅行報告文」によると、同旅行の行程は、下記のとおりであった。10月12日札幌駅を出発、手宮駅で降車した一行は、ノボロギク、クサノワウなどの顕花植物を道端で採集し、宮部教授による解説を随時聞きながら手宮公園に向った。公園での昼食後は、園内で植物採集を続けた。「公園附近の植物生育の状態を観るに諸山悉く伐木せられ禿然見るに堪へさるものあり　只手宮丘上の一部Primitive Flora（原始的植物相―引用者）の状態を表顕するを以て僅かに旧時小樽方面に於けるFloraの状態を窺ふに足るのみ」であったという。

その後、一行は、植物採集をしながら高島郡祝津村字山中への道のり1里弱（約4ｋｍ）を進む。山中での眺望は、「前には漫々たる大洋の浪を抱き、後ろに峨々たる赤岩の絶壁を負ふ　眺望頗る佳なり」と感嘆する程であった。道中採集した植物は、宿泊先の山中温泉「山中水友舘」の舘主に託し、さらに海藻採集のため赤岩海岸に

沿って西に進むものの、高波で海中に入ることができず、海辺に打ち上げられた海藻を夕刻まで採集したという。翌日は、赤岩登山を試みた後、帰路に小樽区内の北海道庁苗圃にて外国産の樹木やクリ、イタヤの苗木のほか、ウドンコ菌病の樹木病状を見学して帰札した。

赤岩海岸のホソメコンブ



大竹温孝筆「ホソメコンブ」（1903 年修学旅行報告文）大学文書館所蔵

上記旅行中、採集した植物は、菌類は山中にて3属10種、手宮にて5属6種、海藻類は赤岩海岸にて18種、草木は全行程中37科84種にのぼった。「植物採集修学旅行報告文」の巻末には、後に植物学を専修する鈴木力治による目録が添えられている。

一方、採集した海陸植物のうち、最も詳細な報告からなるものはコンブであった。特に、最も多く採集したホソメコンブ（*Laminaria religiosa* Miyabe）、チヂミコンブ（*Laminaria cichorioides* Miyabe）については、標準和名と学名のほかに、道内・東北各地における異名、分布、形態、用途などの特徴を詳細に記述している。大竹温孝が描いたホソメコンブの細密画も所収している。

このように、「植物採集修学旅行報告文」がコンブを中心とした記述になったのは、海藻分類研究を進めていた宮部金吾教授による教育・指導の影響が大きい。特に、宮部教授は、同旅行の前年に、北海道殖民部水産課編・発行『北海道水産調査報告　巻之三　昆布採集業』第一編昆布科に、9属26種の分布を示し、8属25種の特徴を詳細に報告している。1893年7月、北海道庁から「海藻種類鑑定」を嘱託され、同年7月9日～8月29日にかけて北海道昆布調査旅行を行なった研究の集大成であった（同旅行日記は川嶋昭二氏による翻刻「宮部金吾博士：北海道昆布調査旅行日記」『海洋と生物』173～176号、2007～08年に詳しい）。

小樽というフィールド

1880年11月に手宮～札幌間の鉄道運転が開始、札幌農学校の教官・生徒にとって、高島郡は往路2時間半の利便に優れたフィールドとなった。海陸に恵まれた環境は、標本採集地として最適であった。さらに、1897年10月には北海道庁が高島村字弁天島に水産試験所を設置したため、魚類・貝類といった海洋動物の生育・養殖試験や施設・器械の見学が可能となり、講義で修得した知見を広げる格好の実習地となった。

1907年、札幌農学校は東北帝国大学農科大学に昇格、翌年1月、高島郡に隣接する忍路郡忍路村に、水産学科忍路臨海実験所の落成をみた。この地を選んだ理由として、佐藤昌介学長は文部大臣に「後志国忍路郡忍路村ハ本道西海岸ノ漁村ニ有之其地形天然ノ小樽港ヲ成シ船舶ノ繁留ニ適シ且近海ニハ四季多少ノ漁獲アリ殊ニ札幌区ヲ距ル僅カニ三十哩又交通上聊カ不便ノ感無之臨海実習上好適ノ地ト被認候」と上申している。

（北海道大学大学文書館）